

氏名	杉山 佳
ヨミガナ	スギヤマ ケイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第630号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 不在 〈作品〉 der rahmen VIII 一部屋曼荼羅 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	海老 洋
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	植田 一穂
（副査）			（	
（副査）			）	
（副査）			（	
（副査）			）	
（副査）			（	
（副査）			）	
（副査）			（	
（副査）			）	

（論文内容の要旨）

私の絵画制作における動機は、本来そこにあるべきものが存在しないことを意味する「不在」をテーマに、具体的な対象＝「存在」を描くことで間接的に立ち上がる、「観念としての対象」を想起させることにある。

具象とは、現実の物体をそれとわかるように表す美術のことであるが、私の絵画制作での試みは、具体的な対象を描きながら、それとは別の、画面上に可視化しない対象がそこに居た余韻を表すことである。日本画の制作では、写生の重要性や、対象と描き手の主従関係（対象が主、描き手が従）を学んできたが、私はその外側に興味を持った。

人が関わった痕跡を描くことで、画面には登場しなくても、人が確実にそこにいた場面を切り取る。そこに「不在感」が生じる。実在する、もしくは実在していた対象を描くことで、描かない存在を表すという、メタフィジカルな状態の絵画を成立させることが、私の制作の狙いである。

本論文では「不在」をテーマに、東洋的な「無」や「見立て」表現をバックグラウンドに、私が奈良県で生まれ育ったことの影響、日本文化に見られる様々な「不在」や「見立て」表現に言及しながら、自作品を評説した。また自作品では「見立て」の手法と、既存の芸術作品からの「引用（サンプリング）」を駆使して画面構成を行い、作中の具体的な登場人物の「不在」を表している。それはあくまで「ささやかな遊び」としての企てであり、日本文化に見られる「形式の借用」の域を出ないこと。そしてそれらの総合的な創作として修了制作「der rahmen VIII-部屋曼荼羅」で行なった、「見立て」と「不在」の表現の可能性について論述した。

第1章 不在の定義

第1節「不在の原風景」では、「不在」が主たるテーマになった理由を、奈良県出身である自身の出自から考察した。

第2節「あることとないこと」では、存在に対する西洋と東洋の捉え方を比較しながら、画面上に描かず、再現しないことで存在を際立たせるという、逆説的な表現からの「不在」について論述した。

第3節「美術作品に見る不在感」では、日本画、工芸、現代美術で不在感を表した作例と、私が表したい「不在」のあり方を比較し論述した。

## 第2章 不在を表すための見立てと対象

第1節「見立て」では、日本美術の伝統的な表現で、「類化性能」と深い関わりがある「見立て」について、現代美術に見られる「シミュレーションイズム」との相違点を論述した。また小村雪岱の作例と自作品を挙げながら、「見立て」について考察した。

第2節「対象の選択」では、私が本棚を好んで描いてきた理由として、幼少期に制作した「昆虫標本」が影響していること。また描く対象として、本棚を標本箱に「見立て」、部屋を人物に「見立てた」経緯について述べた。

第3節「肖像画としての部屋」では、フィンセント・ファン・ゴッホの作品「ファン・ゴッホの椅子」「ゴーギャンの椅子」にみられる、「肖像の見立てとしての対象」について考察した。椅子を描くことで、自身やゴーギャンのポートレートとしてそれを昇華したゴッホの作例と、自作品を比較し論述した。

## 第3章 引用と不在

第1節「引用」では、人物不在のポートレイトを制作する際、具体的な絵画作品や様々の作曲方法と共通していること。そして私が使用するサンプリングは、「遊び」としての画面構成であることを、和歌や浮世絵などの日本文化の作例と比較し論述した。

第2節「連続性」では、私にとって形が連続するモチーフは、描く対象として魅力的であること。そして磯辺行久、クートラス、曼荼羅から構図をサンプリングした自作品を解説した。

第3節「提出作品解説」では、前述の内容を踏まえ、博士提出作品「der rahmenⅧ（部屋曼荼羅）」の解説を行った。この作品は、学部3年時の古美術研究旅行で見た「当麻曼荼羅」から、基本構図をサンプリングしている。またそれぞれの「区画」も、既存の美術作品から「引用」しているため、サンプリングソースを解説した。

## 終章

ここでは、なぜ人物を画面に描いてこなかったのか、描かない理由についての最終的な結論を述べた。

### （論文審査結果の要旨）

本論文は、人や特定の人物がそれに関わった“痕跡”を描くことで、現在の「不在」を表そうとする筆者の創作論を論述したものである。

奈良に生まれ育った筆者は、平城宮跡を見てかつての都に想いをはせ、扉の向こうにあるはずの秘仏に手を合わせるといった生活を、幼い頃から違和感のない慣習として行なってきた。そのためここでの「不在」は、“非存在”ではなく“存在”の間接表現といえる。それを筆者は、留守文様や「見立て」、「引用」（サンプリング）など、類似する古今の様々な表現手法を援用しながら、アイデア豊富に「不在」表現を試みている。

第1章「不在の定義」では、まずこのテーマへの動機が、奈良出身という自らの出自に由来すること。「実存の根底」を「有」においた西洋文化に対して、東洋文化は「無」においてきたこと（西田幾多郎）。また「不在」を表した具体事例として、小村雪岱、工芸での留守文様、「影」シリーズを描いた高松次郎などをとりあげて説明する。

第2章「不在を表すための見立てと対象」では、「見立て」と「シミュレーションイズム」の異同について触れ、知的遊戯としての「見立て」に対して、「シミュレーションイズム」は“オリジナル”の概念に揺さぶりをかけたものであり、筆者の場合は「見立て」の方に近いことを述べる。また筆者の作品は、それぞれに物語をもつ大小の矩形画面を集合させたインスタレーション的な構成をとるが、これは同じ形の区画が反復する本棚やマンション（部屋の集合）、幼少期の昆虫採集・標本作りなどの記憶のイメージにつながっているとす。そうした中でとくに机やイスといった室内モチーフが多いのは、部屋をそこに住む人物の肖像画、記憶の容れ物と考え、家具類は人物の「不在」を示唆する好モチーフだからだとす。

第3章「引用と不在」では、提出作品にも用いた方法として、ヒップホップミュージックの「サンプリン

グ)、文学の「本歌取り」などについて説明。提出作品の「der rahmen VIII (部屋曼荼羅)」では、全体の構図を「当麻曼荼羅」からサンプリングする一方、各パーツ作品は古今東西の絵画から自由にサンプリングしていることを明かしている。

筆者の「不在」表現の手法やサンプリング対象は、古今東西のさまざまな美術にわたり、そのアイデアの豊富さは、筆者自身はその模索や組み合わせを楽しんでいる様子を窺わせる。いわば「見立て」や「サンプリング」によって、記憶の標本箱をつくらうとしている感があり、幼少時の趣味から現在の制作までが、無理なく結合・展開している。その多彩さゆえに、観者にサンプリングソースが分かりにくいのではないかという指摘もあったが、ネタバレ明かしを鑑賞の要件としている訳でもないらしい。論述は的確で、それぞれのトピックの説明や関係性の説明も明快である。博士学位論文にふさわしい好論として、審査員一同の高評価と承認を得た。

#### (作品審査結果の要旨)

申請者は奈良に生まれ育ち、その環境から「古いもの」に興味を持ちそしてそれを美しいと感じ、寂れた民家や建造物などをモチーフとし制作していた。しかし、制作を繰り返すうちに、申請者がそれらに惹かれる本当の理由が「不在感」にあることに思い至る。寂れた古い建造物にかつての繁栄を思い、「存在しないものを想起する」ことに惹かれる自分に気づくのである。そして「見えないものに対して何かを見出すこと」＝「不在を描いて存在を表すこと」が制作の軸となっていった。また「西洋的なオリジナル信仰」に対し違和感を覚えながら制作していたという申請者は、ヒップホップの「サンプリング」からヒントを得て、原作からの「引用」や「見立て」という日本の美意識に根ざした技法を、制作の方法論として積極的に取り入れていく。そして描く対象も「本棚」や「部屋」といったものへと移行していき、画面を「標本箱」に見立て、対象を「蒐集」する感覚で画面構成を考えるという提出作品の発想へと結びついていった。人物そのものは描かないが「部屋という空間」を描く事でそこに暮らす人物を暗示することができる、そしてそのことがより画面にリアリティを与えることができるのではないかと申請者は考える。

提出作品「der rahmen VIII (部屋曼荼羅)」は、集合住宅に見立てた「不在の群像」を描く。大まかな構図を「当麻曼荼羅」から引用した364×546 cmの巨大な画面は100 を超すパーツで構成されており、それぞれのパーツはポートレートとしての部屋を複合させた「集合住宅」を表現し、「記憶の標本箱」に「見立て」た構成となっている。大小様々な部屋が「不在」の状態を示しており、古今東西の様々な絵画からサンプリングし、繋ぎ変えて仕立て直した作品と言える。大画面をコントロールする構成力、技術ともに確かなものであり、素材である岩絵の具の特徴ともいえる物質感を伴った画面の完成度は高い。しかし、申請者も気付いているが、作品が巨大化したため物体としての存在感が強くなりすぎ、本作品の意図とするところの「不在」感が薄れたように思える。申請者の求めるリアリティを感じるまでには至らなかったが、作品にユーモアを取り込んでいくという新たな展開の発見もあった。今後の可能性に期待したい。

以上の点から、審査会においては審査員全員の評価と承認を得、学位にふさわしい作品であると判断し合格とした。

#### (総合審査結果の要旨)

申請者は幼少より青年期にかけて古都「奈良」で過ごしている。創建当時の姿が永遠に保存される幾多の文化財と、存在の跡だけが残る史跡や古都の残骸が同居する生活空間の中で、終焉を迎えた都の中にこそ見られる「ないもの」の存在感、衰退や不完全の美しさに惹かれていった。その体験は本論、本提出作品の主題でもある「不在」の表現の出発点である。

「見えないものに対して何かを見出す」＝「不在を描くことで存在を表現する」という申請者の制作は、遠近法的な存在感や陰影による立体的な実感を中心とした絵画の基礎学習を経ながらも、日本画に出会い、その中で絵画的な思考を繰り返すうち、無や空の観念を余白や間として捉え描くことでより強い「存在」を感じさせる試みへと変化していった。

論文では「見立て・引用」というキーワードが多く取り上げられ、和歌の本歌取りについても語られる。本来それらは主題が引用されるもので、主題を借りて自作のバックグラウンドに据え、新しい表現をつくるのが通常であるが、本論、本提出作品では引用されるのはその「不在」である。人物が主題の絵画作品からは人物抜きの家具や背景がサンプリングされている。それらは主題の存在を裏打するが、そのものにはなり得ない雌型のように扱われており、実感は儚いが覗き込むと主題の存在が際立つ構造となっている。

また、音楽を引用により成立させるハウスやヒップホップについても語られるが、申請者はそこでも派手なリフの抽出や、印象的なフレーズの引用ではなく、いわゆるブレイクビーツ、リズムトラックの部分に注目している。論文中では引用やサンプリングが「知っていると楽しめる」遊びの要素としても語られるが、実際の作品では主題を消し去ったリズムやビートの抽出とその再構成から生まれるグルーブを表出する作業のように思われる。

提出作品「der rahmenⅧ（部屋曼荼羅）」は申請者の語る「引用」、「サンプリング」の収集物の洪水が巨大な曼荼羅状の構造で描かれている。中央に据えられた涅槃図のサンプリングもまた、「不在」の引用である。涅槃図とは釈迦の入滅を表現したもので、仏教世界の中心が不在となる世界が描かれるものだが、提出作品には当然のように釈迦は描かれず、同時に一切の人物、動物も描かれてはいない。涅槃図は「人、動物、森羅万象ことごとく嘆き悲しむ」と解説されることが一般的で、なるべく多くの種類の人物、動物を表現することが目的とされている。すでに死亡して「不在」である釈迦の母、摩耶夫人でさえ薬袋の形で画面に「存在」を表現されるのが通常である。涅槃図という、釈迦の「不在」と森羅万象の「存在」が最重要視される絵画の構造のなかでその全てを「不在」として引用し、強い印象を担わせている。その中心部分と周囲の小作品の日常的なリズムとの対比が、作者の意図的な仕掛けとなっている。

論文には、反省材料として「不在」を表現するはずの提出作品に意図せず現れた物質的な存在感について触れているが、それらは作品全体の巨大さと先述のグルーブ感により表出したものとする。ただ、出発点に戻って、出生地である奈良の平城京跡のような「ないもの」の圧倒的な存在感との相似を考えると、今後のさらなる表現の発端であるようで興味深い。

制作に於ける日本画技法や、材料研究は非常に高い水準のものであると認められる。

審査会においては、審査員全員が一連の作品を学位にふさわしいものとして評価、判断し合格とした。